

酪農学園大学 農食環境学群環境共生学類

訪問調査対象 プログラム名	地球上で最も生物多様性の高い地域において野生生物保全手法を学ぶマレーシア・サバ大学との相互協力研修
類 型	語学習得型・専門履修型・フィールドワーク型×選択型

A. 海外プログラムの詳細

【要旨】

- 主に2年生を対象とした本プログラムの目的は、生物多様性が高いボルネオ島（マレーシア）のジャングルでの活動を通して、サバ大学（マレーシア）の学生と日本・マレーシアそれぞれの国における野生動物と人間の共生の課題を共有し、それぞれの環境に適した生物多様性について議論し、生物多様性保全方策を探ることである。
- 本プログラムは、①バトゥプティ村での活動（植林活動、野生動物の調査、水質調査など）とホームステイ、②サバ大学での英語講座の受講（英会話、英作文、英語プレゼン演習）と活動（サバ大生との交流、植林活動、標本作成、自然保護区視察など）で構成される。
- 事前学習は渡航3ヵ月前よりマレーシア語、マレーシアの社会・文化、英語学習など入念になされている。
- 本プログラムは、3年次以降の専門学修に向けた入門的プログラムであり、渡航前後それぞれに履修する科目との関連性が高い。

1. 教育活動、教育支援、アセスメントと対応した教育目標設定

全学、学部あるいは学科でのDPあるいは教育目標との対応関係が明確である

本プログラムの実施主体である本大学の環境共生学類は、森林の保全や野生動物の保護など生物多様性の保全を学修テーマとする学類である。本プログラムは、生物多様性が高いボルネオ島（マレーシア）のジャングルでの活動を通して、本大学とサバ大学（マレーシア）の両大学学生がそれぞれの国における野生動物と人間の共生の課題を共有し、それぞれの環境に適した生物多様性について議論し、生物多様性保全方策を探ることを目的としている。

本プログラムは、当学類のディプロマポリシーの1つ、「フィールドにおける実践的な教育により現場感覚を体得し、物事の本質を見極めるとともに今後の課題を解決する能力」に対応したプログラムである。加えて、本プログラムを通し、全学のディプロマポリシーに明記される「農・食・環境・生命」の有機的結びつきを理解し、課題探求力、問題解決力、そして現地での英語での対話を通じたコミュニケーション能力の向上を企図している。

また、本大学が掲げる国際化のアクションプランでは「世界の各地域で中核となる国際人の養成」「途上国・新興国への留学生派遣と受入れの取り組み」「国際的交流のネットワーク

拠点の整備」を目標としている。本プログラムの内容およびサバ大学との交流は、本大学にとって、いずれの目標にもかかわる重要な意味を持つ。

2. 海外プログラムの実施状況とその内容

専門にかかわる主目的のプログラムに加え、現地の学生や人々とのコミュニケーションにかかわるプログラムが明示されている

【実施時期】 夏期（8～9月）、春期（2～3月）

【実施期間】 34日間のグループと12日間のグループで構成

【実施場所】 サバ州のキナバタンガン郡バトゥプティ村とコタキナバル（サバ大学など）

【参加学生数】 例年両期間合わせて30人程度（34日間：15人、12日間：15人）過去3年間に96名が参加。

【プログラムの具体的活動内容】

本プログラムは、バトゥプティ村での野生動物調査、植林、ホームステイとサバ大学での講義および学生交流などで構成される。

本プログラムを含む「海外自然環境実習」は、本プログラムに加え、モンゴル、フィリピン、ドイツ、インド、そしてカナダで実施される7つのプログラムで構成され、2年生を対象としている。多くのプログラムの参加者が例年5人程度のなか、本プログラムは例年約30人が参加し、「海外自然環境実習」で最も規模の大きいプログラムとなっている。プログラムの担当教員のリーダーは、社会連携センター長を兼任し、かつて青年海外協力隊で勤務した経験と当時から培ったネットワークを活かして本プログラムを立ち上げた。本プログラムの原型は2006年に「自然環境ボランティア実習」として開設し、当初はボルネオ島などでの植林やボランティアに取り組む内容であった。その後サバ大学と学术交流協定を締結したり（2011年）、一時期はJICAから資金提供を受け、旭山動物園（北海道）と連携して野生動物の保護や村づくりをテーマにした取り組みを取り入れたりしながら（2012～2016年）、現在のプログラム内容に至っている。この活動は表彰を受けたり、雑誌で取り上げられたりするなど社会的評価も受けてきた。プログラムは2019年度現在、3名の教員で運営されている。

本プログラム（2018年度2～3月実施の場合）は、大きくは2/16～21のバトゥプティ村での活動（植林活動、野生動物の調査、水質調査など）とホームステイ、2/24～3/16のサバ大学での英語講座の受講（英会話、英作文、英語プレゼン演習）と活動（サバ大生との交流、植林活動、標本作成、自然保護区視察など）で構成される。

2/16-21では、まずサバ大学に行ってオリエンテーションを受け、キナバタンガン郡バトゥプティ村に行く。現地では、野生動物の生息地を保全するための植林活動、キナバタンガン川流域で水草の生態系に大きな影響を与えている外来種の水草の除去作業、ジャングルのナイトウォーキングやライトトラップを仕掛けての野生動物の調査に取り組む。最後の2日間で発表資料を作成し、最終日に村の人々を前にして活動や調査したことの結果を英語

で発表する。宿泊はホームステイとジャングルにある小屋を利用したエコキャンプによる。ナイトウォーキングなどのツアーガイドを除いては、村の人々の多くはマレーシア語しか話せないで、学生は、村でのホームステイでは、カルチャーショックを受けながら現地の家族とのコミュニケーションを何とかこなそうと苦労する。2/22～23 はサバ大学の見学と現地での島での研修をこなし、参加者の半分は現地の JICA を訪問したり、クアラルンプールでの研修を受けたりして 2/27 に帰国する。

参加者の残りの半分は、2/24～3/16 の期間、サバ大学での英語講座の受講と現地での活動に取り組む。この期間の基本的な日課は、午前中は英語講座の受講、午後は活動という構成である。英語講座では、英会話やプレゼンテーション演習の授業を中心に行われるほか、サバ大学の教員によるマレーシアの自然や生物についての講義が英語で行われたりもする。プレゼンテーション演習の中では、日本や北海道、本大学についての紹介や学修している内容を紹介するプレゼンテーションを英語で行う回がある。この回には、本大学に留学したことのあるサバ大生や、将来本大学への留学を希望するサバ大生なども参加し、積極的に質疑応答を行う。このプレゼンテーションの後、「英語をもっと勉強してから来れば良かった」と反省し、帰国後、英語学習に注力する学生もしばしば見受けられる。午後は、植林活動をしたり、昆虫標本を作成したり、サバ大生とサバ大学内にある博物館、水族館および森林の視察をしたりする。この期間中はサバ大学のゲストハウス 2 棟に男女分かれて宿泊する。ゲストハウスの食堂で、サバ大生と一緒に食事を作ってパーティをしたりする。

なお、本大学は、サバ大学と学術交流協定を結んでおり、先方への派遣と先方からの受け入れとの双方向の学生交流があり、本プログラムを含めサバ大学から例年 10 人以上の学生を本大学で受け入れている。

3. 事前・事後学習およびカリキュラム全体との関連

全学・学部・学科のカリキュラムと連携している（事前・事後両方に関連科目がある）

現地での学修に関連する事前学習のコンテンツが潤沢に用意されている

現地での学修や生活に関連する何らかの事後学習コンテンツが用意されている

事前学習については、本プログラム（2018 年度 2～3 月実施）のガイダンスを 2018 年 4 月に開催し、プログラムの目的や内容、必要な費用などについて説明して参加者を決定させた上で、11 月から月に 2～4 回程度、チケットの取り方、マレーシアの環境や文化、マレーシア語、安全対策（事故、テロ、病気など）などについて講義が開催される。特にグループワークによるマレーシア語の学修には力を入れている。講義の時間帯については、学生の都合を聞きながら昼休みや夕方に実施している。参加できない学生には指導が行き届くよう SNS を利用して提出物などの連絡をしている。講義にはサバ大学から本大学に留学している学生もサポーターとして参加してもらっている。また同時に現地では英語力も必須となるので、学生には e-Learning や学内で月 2 回開催している英語を学ぶためのイングリッシュカフェなどを利用して英語のトレーニングをしておくことも強く勧めている。

事後学習については、動画やスライドを使った報告書の作成を義務付けており、これを使った報告会も開催している。また多くの参加学生は、現地で英語学習のモチベーションをかきたてられており、学内のイングリッシュカフェや e-Learning を利用してさらなる英語力の強化に努めるよう指導している。

本プログラムはカリキュラムにある他の科目との関連性が高い。渡航前に 2 年次で「国際関係論」「国際理解」「国際関係とメディアコミュニケーションの科学」を履修して異文化理解の知識を備えておくよう指導していたり、プログラムの内容そのものでは、2 年次までに学ぶ「野生動物学の基礎」「生態学」「土壌学」などでの知識が活かされたりする。また本プログラムで学ぶ内容は、渡航後の 3 年次でのゼミ選択の参考知識になるほか、北海道内や海外で野生動物の調査研究を実践する「野生動物実践実習」など 3 年次以降に学ぶ専門科目への導入的知識を与えるものでもある。

4. 効果測定・アセスメント、カリキュラムマネジメント

海外プログラムの成果を評価する何らかの仕組みがある

成績評価については、現状は修了書を出すことに留まっている。本プログラムの担当教員としては、現地での活動をサバ大学の教員に本学の成績評価基準に則って評価してもらいたいと考えている。また担当教員より渡航前後それぞれに TOEIC を受験して効果測定するよう指導し、その結果も自主的に報告させている。把握している範囲では、多くの学生は、渡航前後でスコアが 100 点以上向上しているようである。

プログラムの改善については、本プログラムを担当するリーダー教員を含め 3 人の教員が行なっている。プログラム終了後、サバ大学で本プログラムでの講師を務める教員やバトゥプティ村で本プログラムを手伝うガイドなどからもらう意見も参考にしつつ検討する。改善事例としては、かつてバトゥプティ村での活動にはマレーシア語の通訳を付けていたが、これでは学生が自ら積極的に現地の村人とコミュニケーションを取ろうとしないので、思い切って通訳を付けるのをやめた。確かに通訳がいないと学生は困ったが、それでも懸命に村人らとジェスチャーもまじえながらコミュニケーションを取って解決するので、良い改善であったと本大学では考えている。また本プログラムは現状、リーダー教員が中心となってプログラムを運営しているが、リーダー教員がいなくとも組織的にプログラム運営できるよう、特にサバ大学と円滑なコミュニケーションができるように、担当教員の中にサバ大学の元教員であった教員をプログラム担当に加えたりしている。

5. 本プログラムに参加しやすくするためのサポートや工夫

奨学金については JASSO の奨学金制度を利用しているのみである。

単位については、科目「海外自然環境実習」として卒業要件単位 1 単位が与えられる。

月 2 回開催されるイングリッシュカフェは、主催者である酪農学園青年海外協力隊 OV 会が提供する食事を食べながら本大学に留学している学生たちとの英会話を通じて英語力

を身につけるためのイベントであるが、その内容には本プログラムをはじめとした本大学が提供する海外プログラム紹介も含まれている。この活動も本プログラムへの参加の促進材料となっている。日本人学生、留学生合わせて毎回 20～30 人が参加している。

6. 本プログラム参加者の他の海外プログラムへの参加

本プログラムは長期留学をはじめとした他の海外プログラムへの学生の参加を促してきた。そのひとつとして、本プログラムを修了した学生は、自身単独で海外調査に行くために必要な基礎知識を身につけ、海外プログラムに参加することへの心理的ハードルが低下していることが挙げられる。例えば、旅行会社を通さないインターネットでの国際便 LCC の航空チケットの買い方、現地ホテルの予約の仕方、現地での公共交通機関やタクシーの乗り方などである。学生がこの基礎知識を身につけられるのは、本プログラムでは日本から参加者全員が集まって現地を往復するのではなく、現地の空港を待ち合わせ場所として、各自でチケットなどを手配して往復するように指導しているからである。ただしこの教育は、決して大学や担当教員が放任しているわけではなく、むしろ危機管理への配慮に苦勞するくらいである。

本プログラムに参加した学生のうち、数名が参加後にサバ大学などでの長期留学に挑戦しているほか、ほかの海外プログラムや青年海外協力隊に参加したりする学生もいる。

なお本大学では海外の大学等に 1 学期間以上留学する学生の GPA が一定の基準を満たしている場合には、本大学の授業料の一部を免除する規定を設けており、このことも長期留学を促す材料となっている。

B. 学生インタビュー

1. 酪農学園大学学生 1（農食環境学群環境共生学類野生動物学コース 2 年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

大学に入学する前から、大学に進学したら海外プログラムに参加してみたいという気持ちが強かった。中学生の頃から洋楽が好きで海外に関心があり、また大学入学以前にはアメリカへの海外旅行に行って楽しかった経験がある。また高校生の時には来日した韓国人と英語で会話するという経験もした。大学に入学してからは、学内にあるイングリッシュカフェに通い、何人もの留学生から話を聞き、自分も海外で学んでみたいという気持ちが一層強くなった。

（2）参加した海外プログラム

3 年次前期に、マレーシアでの約 1 ヶ月の海外プログラム「海外自然環境実習（マレーシアプログラム）」に参加した。自分は、英語が不得意であったので語学力をつけることと、

専門科目を学ぶ中で動物に高い関心を持っていてマレーシアの野生動物を現地で観察したかったことが当プログラムを選択した理由である。

渡航後最初の1週間はボルネオ島のジャングルで環境問題や野生動物について学修した。残りの3週間はサバ大学で語学研修を受けるとともに現地のバディらとの交流や自然観察等に取り組んだ。

ボルネオ島のジャングルでの活動は、現地の家庭にホームステイをし、植林をしたり、ジャングルを巡り昼夜野生動物の観察をしたりした。5~6人の班に分かれて活動し、班ごとに付けてくれる現地のガイドが、遭遇した動物や昆虫などの名前と特徴を英語で解説してくれ、それをメモしたり写真を撮影したりした。植林では対象となる土地の草を刈って更地にし、そこに50本の苗木を植えた。植林を通じて環境保護活動の大変さを骨身にしみて理解し、だからこそ日頃からの自然環境の維持が重要だと感じた。1週間の活動の最終日にはメモや写真を元に班ごとの活動の成果をプレゼンした。ジャングルでの活動は巡るコースが班ごとに異なるので、プレゼンの内容も班ごとに特徴が異なり良い学修となった。

残り3週間のサバ大学での活動は、午前中はサバ大学による英語プログラムを受講し、午後は植林、昆虫採集、昆虫標本作り、現地の学生バディとの交流を行なった。英語については、TOEICのスコアが芳しくなかったのでリスニング能力を中心に鍛えようと意気込んで参加した。プレゼンの授業があったこともあり、スピーキングの力と合わせて向上させることができた。

(3) 事前・事後学習について

事前学習として、マレー語講座、マレー文化や社会を学ぶ講座が12月ごろから開かれた。マレー語講座についてはプログラム担当の先生がマレー語の指導を行い、挨拶など生活に必要な簡単なマレー語を学んだ。実際に現地に行ってみると英語を話せない人が予想以上に多く、そうした人には事前指導で身につけたマレー語を使ってコミュニケーションを図ることができた。挨拶のみならず、現地の商習慣である買い物の際の値切り方などをあらかじめ知っていたことも役立った。

また本プログラムに参加する学生は、あらかじめ「国際関係論」「国際理解」「国際関係とメディアコミュニケーションの科学」を履修することが推奨されていたので、これらを履修した。異文化理解の基礎知識を持って渡航できたため、バディたちとの交流を通じて垣間見た現地社会の理解がより深まったように思う。

特に事後学習というものはなかったが、本プログラム参加後、英語学習をさらに進め語学力を上げるためのモチベーションに繋がり、また専門学修の深めるべき分野が野生動物の保全というテーマに定まった。こうしたことから本プログラムはカリキュラムと繋がったものであると感じた。

(4) 成長を感じる点

第1に英語の語学力が大きく伸びたことに成長を感じている。渡航当初は現地の人々の英会話を聞き取れなかったことに大きなショックを受けた。加えて、自分は本プログラムに参加する前のTOEICのスコアは430と非常に低かったが、帰国後のスコアは545と参加前から100以上伸びた。この伸びは本プログラムでの学習成果であり、引き続き英語の学習を続け、スコア900を目指したいと考えている。加えてコミュニケーション力も向上したと感じている。ジャングル活動でお世話になったホームステイ先の子供たちと遊んだ時には英語は通じなかったが、ボディランゲージなどを使ってコミュニケーションをとることができた。この経験があったおかげで、その後、自ら海外の野生動物の観察に行こうと、自分で行き方を調べて予約などの手続きもして3年生の8月にフィリピンに1ヵ月赴いた。そこではマクタン島に行き、メガネザル、ヤギ、インコ、ウミガメなどを観察することができた。

第2に異文化対応力が高まったことである。例えば、現地の食習慣に従い右手でご飯を食べることに慣れたり、現地のサバ大学の学生が寮に来て振舞ってくれたマレーシアの伝統料理を美味しくいただけたり、さらにはジャングルでの活動で使ったシャワー用の雨水にはボウフラが湧いていたが我慢して浴びることができたりした。日本にはない現地特有の環境に適応できる自信がついた。

第3に現地での活動を通じて、東南アジアのジャングルの野生動物の生態などについての知識が増え、また水草外来種の駆除の体験からその繁殖率の高さからくる環境破壊への問題意識に繋がった。

(5) 満足・不満足な点

満足している点は、現地の学生たちとコミュニケーションをとったり、ホームステイ先で現地の人々の文化や生活を知ったりすることで、マレーシアの文化を理解できたことである。欲を言えば、3ヵ月から半年、現地で学びたかった。

(6) 今後の学修

本プログラムをきっかけに海外の大学院に進学し、野生動物の保全や絶滅危惧種についての研究をしたいと強く思うようになった。例えば、マーモットというリス科の動物は、自然環境での生息数は減少しているが、モンゴルの国立公園内では増加させることに成功した。この事例を他の地域でも適用し、絶滅を防ぐことができるだろうかということを研究したいと考えている。そしてカナダのバンクーバーアイランドでは、このマーモットが30匹まで減少しており、これを増加させる取り組みを研究を通じて行いたい。

2. 酪農学園大学学生2（農食環境学群環境共生学類野生動物学コース3年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

海外への憧れはなく、高2で実施される修学旅行は台湾だったが、行くまでは国内でいいじゃないかと思っているくらいであった。実際に台湾に行き、現地の高校生と過ごす機会の中で、自分の英語が意外に通じることや、台湾の歴史や文化に接することで、海外にも興味を持ち始めた。

北海道の出身ではないが、元々動物に興味があり、単に動物のことだけでなく、人とのかわりで動物が学べる本大学を選んだ。入学前から海外実習があることを知っており、アフリカ象が好きで、野生動物が多いケニアのプログラムがあることも、進路選択のポイントであった。海外に行きたいというよりは、野生動物に関して学びたいとの思いで、入学後、7日間のケニアのエコツアーに参加した。野生動物のことに関する多くの学びがあったが、コミュニケーションが取れない場面もあり、語学の難しさを再認識した。

大学1年次の「国際関係論」と「国際関係とメディアコミュニケーションの科学」の講義で、マレーシアのパーム油開発に関連して、森林伐採やオランウータン生息地の減少などから、野生動物への影響や日本企業とマレーシアのかかわりを学んだことも、マレーシアプログラムに参加する強い動機となった。マレーシアの野生動物のことを、もっと知りたいと思った。

（2）参加した海外プログラム

2年次後期の2月15日から3月17日迄のマレーシア・サバ大学との相互協力研修に参加した。全34日間の期間中、最初の1週間のエコキャンプとホームステイ、後半3週間のサバ大学での英語講座と諸活動の大きく2つに分けられる。

前半のバトゥプティ村エコツーリズム協同組合 KOPEL でのエコキャンプでは、本学の先生も先方大学のサポーター学生もついてこないことになっていて、本当に学生だけで放り込まれたといった状態だった。熱帯雨林を管理している人たちが植林活動などを通していろいろと教えてくれ、森の中の高床式宿泊施設を利用して宿泊もした。テナガザルなどの希少野生動物の観察もできた。

また、都心から何時間も離れた村での7日間のホームステイでは、ひと家族に学生5人でお世話になった。現地式の雨水を溜めたお風呂（シャワー）マンディは、茶色くボウフラのいる水を利用することもあるが、2日目からは気にならなくなり、食事やダンスや子供たちとの遊びを通して、現地理解がとても進んだ。

後半3週間のサバ大学での英語研修は、本学学生だけで行われるが、授業内容に難しい面もあり、寮に戻って日本人同士でも、英語だけで話そうと決めて取り組んだりもしていた。そうすると、あの子が“こんな表現を使うんだ”と、日本人同士でも相手の英語力で刺激しあうことができ、切磋琢磨できた。語学以外の面でも、サバ大学が提供する植物や昆虫の標本作りなども、充実したプログラムであった。

(3) 事前・事後学習について

1年次の国際関係の講義が参加のきっかけでもあるが、マレーシアの事前の学習に繋がっている。プログラムの参加選考の学内審査のためには、英語力アップを目的に、2年生の前期から TOEIC の勉強を独自に始めた。

参加が決まってからは、渡航の 2 カ月前から事前説明授業が数回ある。現地の人と仲良くなりたかったので、マレー語を事前説明授業で紹介された You Tube を利用して勉強した。大学が提供する、留学生と共にランチを食べながら意見交換をするイングリッシュカフェ（月 2 回実施）があったが、1 回だけの利用に留まった。

プログラム帰国時は 3 月中旬の春休み期間で、その後、3 年次になると専門の勉強が中心で海外プログラムとつながっている国際関係系の事後学習がないと思ったが、所属ゼミでの学習での取り組みや、参加自由のイングリッシュカフェを月 2 回主催する側になったり、マレーシア・サバ大学からの留学生に対して、自分にしてくれたようにウエルカムパーティーを開いたりして、普段の継続的な学びに繋がっていると感じる。

(4) 成長を感じる点

サバ大生と生活を一緒にする際に、この人はイスラム教に対する考えが強いなとか、この人はハラルが柔軟だなとか、一人ひとりが持っている精神が違うなということを感じ、物事や人を知ることの大切さを、もっとしっかり持ちたいと思うようになった。宗教観も含め、異文化対応力は向上したと感じる。

語学面では、サバ大生は、子供の時には、マレー語のみや、中国系の学生の場合は中国語のみなのに、大学生になると、みんな 2・3 か国語は普通にしゃべれる。凄いと思う一方で、後半は彼らが土日も含め傍らにいてくれることによって、自分の英語やマレー語の語学力向上と共に、コミュニケーション力も向上できた。

自分のかける思いが強い、野生動物の学びができることで、プログラム参加中から、参加後の報告書や次年度参加希望者への説明資料作成など、率先してできるんだということ、自分で分かった。自分の中で、殻を破ったと思う。結果、高校まではなかった、リーダーシップが一番身についた。

(5) 満足・不満足な点

本学とサバ大学やエコツーリズム協同組合 KOPEL が、相互協力しているからこそ出来る、環境保全（植林活動）などのプログラムに非常に満足している。滞在場所の治安も非常によい。その中でも、学生時代という短い時間の中で、同年代のサバ大学生と過ごした時間は、意識の違いを知れたことも含め、一生の財産だと思う。不満はない。

(6) 今後の学修

マレーシアでの休日にビーチへ行った際に、サンゴ礁の綺麗さと、海岸線にプラスチック

ごみが多数あることを知った。東南アジアでのサンゴ礁保全の活動とプラスチックごみ問題の研究を深めたいと考えだしている。3年次も海外プログラムに参加したいと考えているが、就職活動の関係で、3年次は難しいのではないかとの助言もあり、参加は見送ることにしている。

将来的には、環境保全に関して環境経済学の視点から人の行動を変える発信ができるように、勉強に取り組むとともに、就職先を探したい。

3. 酪農学園大学学生3（農食環境学群環境共生学類生命環境学コース3年）

（1）入学前の海外・異文化体験、海外プログラム参加に対する気持ち

入学前には海外体験も異文化体験も全く無く、留学も全く考えていなかった。

本プログラムに参加しようと思ったきっかけは、授業で紹介があり、日本で見られない熱帯雨林を見たくて参加しようと思った。自分の専門と直結したプログラムだったことが大きい。

（2）参加した海外プログラム

最初の1週間はバトゥプティ村に行き、学生3~4人で村人の家にホームステイをし、さらにエコキャンプのコテージで3泊しつつエコツーリズムに参加した。ジャングルで生物の多様性を観察したり植林をしたりした。

いきなり放り込まれる感じだった。エコツーリズムの現地ガイドは英語で話してくれるので、できるだけ自分でも直接話そうと思ったが、英語力が足りず英語ができる仲間に頼った部分が大きかった。

その後、サバ州サバ大学に移り、英語研修プログラムを3週間受けた。英語の授業は日本よりも発言が求められた。受動的ではなくアウトプット中心でよかった。自分は英語力最下位だったが、友達に教えてもらいながらなんとか修了した。現地では英語は上達しなかったが、帰国して学ぼうというきっかけになった。

午前中の英語の授業の後、午後はサバ大学の先生が専門分野を教えてくれ、フィールドワークを毎日のように行った。大学内にある森やビーチに行き行って標本づくりなどに取り組んだ。また異文化体験も組み込まれていて、自分が知らなかったイスラムの世界にも触れることができた。

サバ大学ではタクシーとバスの乗り方だけを教えられて、あとは自分たちで行動するように言われたが、土日など大学が用意してくれるイベントがない日でも自律して動けたと思う。酪農学園大学からは10人程度の参加だったが、サバ大学の学生が15~20人付いてくれ、放課後にビーチに一緒に行ったり、宿舎で日本人学生は天ぷらを作って彼らに食べてもらったり、マレーシア料理を彼らに作ってもらったりと交流した。

(3) 事前・事後学習について

事前学習として派遣 2 カ月前からマレー語、マレーシア事情講義（熱帯雨林や宗教・多民族性などの社会のこと）が週 1 回大学から提供された。マレー語はあいさつ程度で英語の学習にも少し取り組んだ。自分たちで自主的に定期的に集まってマレー語を追加で勉強したりもした。

カリキュラムとの関連については、2 年までに学んだ「野生動物学の基礎」「生態系学」「土壌学」などでの知識がこのプログラムに活かした。また植物の太さの測定、昆虫の同定法等は日本で学んでいったことが役に立った。

事後学習としては、後輩に向けた報告会で発表し、マレーシア留学生との交流を継続している。事後学習プログラムよりも、個人的に専門や英語学習のきっかけになったことが大きい。

(4) 成長を感じる点

このプログラムに参加するまでは英語が苦手で、世界に出ていきたいとも思っていなかった。英語ができないからと自分に蓋をしていたが、そこが前向きに変わった。今は、世界的な環境問題に取り組みたいという思いが強くなり、そのためにも英語が上手になりたいと一生懸命学んでいる。TOEIC は帰国後に猛勉強したので、300 点以上アップした。恥ずかしいが積み重ねしかないと思って取り組めるようになった。

また自分の所属している学類では 3 年生で野生動物学コースと生命環境学コースに分かれる。以前は野生動物学コースに進もうと考えていたが、野生動物を守るためにも環境が重要で、特定の個体だけを助けるのではなく持続可能な支援が必要だと視野が広がり、生命環境学コースに進んだ。このプログラムに参加していなかったら別の人生だったと思う。

(5) 満足・不満足な点

満足しているのは、日本では見ることができない自然や野生動物を見ることができたこと。マレーシア文化を学べたことと、現地の友達ができたこと。満足できなかったことは、自分の語学力が低すぎて、コミュニケーションを取ることが難しかったこと。

(6) 今後の学修

今後は、青年海外協力隊に応募しており一次審査に合格した。卒業後に行くという選択肢もあったが、休学してでも行きたいと考えている。協力隊に行けなかったら、語学留学に行くつもりである。入学した時には、日本で野生動物を保護したいと考え、そのために公務員として地方の野生動物による農業被害を抑えたり、工事の影響をアセスメントしたりする仕事に就きたいと考えていたが、本プログラムで大きく考えが変わり、今はアフリカの野生動物の研究に携わりたい。そのために海外の大学院に留学して研究者になりたいと考えている。